

音声・音楽・演劇のはざままで～言語聴覚療法の周辺～

名古屋文理大学 情報メディア学科

吉田友敬

本日はお招きいただきありがとうございます。いつもは音響学などの授業を担当していますが、本日は音響の話というよりは、私が職務の周辺で行ってきた、音楽や演劇と言った分野と言語聴覚療法の関わりといったテーマでお話ししたいと思います。

私は、ご覧いただける略歴以外に、かつて合唱団や児童劇団などの指導を行っていきまして、そのようなことの中から、音の専門分野との関わり、特に音声との関わりについて、ずっと意識してまいりました。

まず、日本語のリズム的特徴についてですが、言語には特有のリズム単位として、「フット」と呼ばれるものが存在すると言われております。日本語では2モーラフットと呼ばれるように、2モーラ単位でリズムを刻む傾向が見られます。これに対して、英語などでは、同じフットでも、ストレスのある音節ごとにリズムをとっていくため、そのリズム型はかなり異なります。特に、英語などの欧米語では、前置詞や冠詞といったものが多く使われるため、主要単語の前に小さな単語がくっつくことによって、音声として発話する際に、それらが助走の役割を果たします。これに対して、日本語では、そのような助走区間がなく、いきなり主要語から始まるため、発話者にとっては、発話自体が相当の準備を要するハードルの高いものになります。

音楽においては、日本で日常的に耳にする音楽は明治時代以降に西洋から移入されたものです。ここに、西洋の音楽によるメロディーと日本語の間のリズム的齟齬が存在するわけです。西洋風の歌を歌うために、私たちは日本語の通常音声からやや離れた発声法を用いることも多く、自然な日本語と歌うことの両立には高い壁があるように思われます。

また、演劇においても、話し言葉で発話することは、明治以降の標準語教育の影響もあり、結構ハードルの高いものになっていると思います。また、昨今コロナ禍もあり、対面での対話の機会が減っていったことで、ことばによるコミュニケーションを難しく感じる人（特に若者？）が非常に多くなっているのではないのでしょうか。

そんな中、演劇を通してことばによるコミュニケーションの本来のあり方を求め続け、コミュニケーション障がいのある人へのレッスンなども行っている活動を紹介したいと思います。特に先年亡くなりました竹内敏晴氏の活動は目を見張るものがあります。私自身が直接接点を持っているわけではありませんが、私の演劇活動や合唱活動に対して大きな影響をもたらしました。通称竹内レッスンと呼ばれる方法や、その哲学について、多少なりとも私の解釈を交えながらお伝えできればと思います。

【吉田友敬 先生 ご略歴】

- 1986年 東京大学教養学部教養学科卒業（科学誌・科学哲学専攻）
- 1986年 株式会社河合楽器製作所 入社（プログラマーおよび総合企画）
- 1991年 同退社
- 1994年 名古屋大学大学院人間情報学研究科博士前期課程 入学
- 2001年 同研究科博士後期課程満了
- 1996年 専門学校日本聴能言語福祉学院 非常勤講師
- 1998年 成安造形大学 非常勤講師
- 2003年 名古屋文理大学情報文化学部専任講師、助教授、教授となり現在に至る
- 2007年 愛知学院大学心身科学部非常勤講師

「著書」

- 2005年 『言語聴覚士の音響学入門』海文堂出版
- 2020年 同 2訂版